

氏 名 薩 如 拉 (サルラ)
学 位 博士 (英語学)
学 位 記 番 号 甲第122号
学位授与年月日 平成27年3月20日
審 査 研 究 科 外国語学研究科
論 文 題 目 Tea in Terms of Fashion Theory
— A Cultural History of Tea-related Vocabulary in England to 1714—
論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 北林 光
(副査) 大東文化大学教授 大月 実
(副査) 大東文化大学教授 Jeffrey Johnson
(副査) 法政大学教授 曾村 充利

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究の対象・目的・方法

スチュアート朝後半までの茶に関する歴史・文化と、紅茶のイギリス社会における発展過程に流行理論を適用して、当時の資料(具体的にはジョン・ドライデンやトマス・シャドウェル、コリー・シバーなど有名な文学者の作品、旅行記、税金等の公的文書、法律文書、オークションの知らせ、書簡、医学書、あるいは日記作家サミュエル・ピープスの日記のうち1669年までのキャサリンに関係する記述に出てくる当時の世相、政治状況、社会風俗、宮廷生活、ゴシップ、人間関係など)を分析し語彙の発展速度を研究した。

3. 論文の構成、内容

サルラ氏の博士号対象論文『Tea in Terms of Fashion Theory — A Cultural History of Tea-related Vocabulary in England to 1741 —』は中国から欧州諸国に伝来したお茶を飲む習慣と英語語彙の発展研究を扱っている。キャサリン・オブ・ブラガンザがイギリスに来る前は紅茶はコーヒーショップで販売されており、薬として利用されていた。その後キャサリン王妃によってポルトガルからイギリスにもたらされた紅茶を飲む習慣がイギリス王室から上流階級へと広まった。また、キャサリン王妃の壮大な持参金の他にタンジール、ムンバイ、ポルトガル植民地との自由貿易の権利などをイギリスにもたらしたことが挙げられる。お茶の流行によって消費量が増大したことが、イギリスが植民地を拡大する一因となった。そしてイギリスの東インド会社が紅茶の貿易を独占することとなる。紅茶がイギリス社会で発展することがヴェブレンやジンメルのトリクルダウン理論と流行理論に適応しており、喫茶が社会のヒエラルキー内で模倣され、下層まで広まって行ったと考えられる。その流行に影響を受け、お茶がチャ

ールズ二世とキャサリンの姪にあたるメアリ二世女王とその妹アン女王にも愛飲されるようになり、メアリ女王は茶器の収集に興味を持っていた。あるいはアン女王の時代に書かれた劇にもお茶を飲むシーンがたびたび登場する。有名な劇作家コリー・シバーやリチャード・スティールの作品にもしばしば現れる。

また、社会言語学の視点で見ると茶に関する語彙も広がり、「tea」についても英語に借用された直後からその他の英単語と結びついてteaspoon, teacup, teapotなどの語彙を創り出し、それらは今日でも使われている。一方で、teaに関する現在ではもう使われていない慣用句も当時の文献から探し出した。これらの情報を集めるにあたり、17世紀当時の日記や新聞記事、旅行記を基にしたTNA (The National Archives), EEBO (Early English Books Online), OBO (Old Bailey Online)などのオンラインデータベースを使用した。

4. 研究の成果と意義、課題

研究の成果としては、紅茶がイギリス社会に流行した時点からの文献を分析し、紅茶や茶に関する語彙の発展過程を詳細に明らかにしたことである。その結果、初期においては紅茶が上流階級における一つのファッション、ステータスであることがわかった。その後上流階級向けにティーハウスが普及してくると、彼らはそこに集まりお互い政治や経済状況を語り合う場として賑わうようになり、人々のキャサリン王妃に対する印象について再検討することとなった。また、言語面では、茶に関する語彙がOEDに書かれているよりも早い時期に登場していることがわかった。ただ、1714年までは資料の研究を徹底したため上記のようなことがわかったが、今後の課題としては、語彙の発展に関してより正確な情報を得るためには、当時のソーシャルネットワークの分析が望まれる。さらにタイムスパンを広げて18世紀から19世紀まで調べれば、イギリスの中産階級から労働者階級の人々への紅茶の習慣が広がっていくのを明確に知ることができる可能性がある。そうすれば紅茶の流行理論的解釈にもまた違ったアプローチが出てきて、理論化が可能かもしれないと考えられる。

5. 審査会における意見

主査の北林光教授からは、「17世紀頃のほぼ全ての種類の文献を調査した点が徹底している。そのため当時の人々の紅茶に対する感情がそのまま読み取れることが英米言語文化学的視点から評価できる。曾

村教授が指摘しているように、キャサリンの再評価についてはその時代の文献から読み取った結果、再評価しているので、今までの歴史学者の意見より正確にキャサリン像を表した文献学的研究と言える」との評価がなされた。

副査の大月実教授からは、言語学の立場から、「用語の定義、理論的追究、方法論の明示などの点で課題が残るものの、丹念に収集し整理されたデータは、今後の同テーマの研究の基礎資料として有用で意義が認められる」との指摘がなされた。

副査のジェフリー・ジョンソン教授からは「この博士論文は読んでいて楽しかった。射程が驚くほど広くまた深いものである。イギリスにおける紅茶文化はこの論文でなされた研究の中心となっており、そこに焦点があてられていて深みがある。葉草であった紅茶がイギリスの国民的な飲み物へと発展したことが、紅茶文化の物質的な様相や飲み方の決まり、語彙の出現や文化的な変化に刺激を与えたことについての幅広い情報を提供している。この論文は全ての面で非常に質の良いもので、言語文化学の論文としてのモデルの役割も果たしている。」との評価がなされた。

副査の曾村充利法政大学教授からは、「本論文はサルラ氏の学問的能力と研鑽ぶりを十分に証明している。18世紀に入るとティーを使用した慣用表現が出現するのは興味深い。さらにこの論文を基礎として、慣用表現とメタフォリカルな表現の初出や増加、使用頻度などの蒐集と、言語的分析を通し、面白い新しい社会文化史研究の可能性が感じられる。」との指摘がなされた。

結論：

この論文は以下に述べる理由でイギリスにおける紅茶に関する基礎的な研究になると思われる。紅茶を飲む習慣の始まりと、それが定着していく数十年間を論じており、人文学上の一つの貢献であると考えられる。

最大の特徴は実証性である。データベースを利用して大量の文献を調査し、紅茶という嗜好品の流行があらゆる領域に広がり定着していく様子を実証している。そしてテキストを単に引用するのではなく、紅茶の歴史的背景知識と流行理論と言語発展の理論を紹介した後、テキストを分析している。テキストを解釈する際、政治、経済、法律、宗教、社会、医療、階級などの視点から、紅茶に関する複合語・語彙の増大などを分析しているのは、欠かすことのできない方法論であると考えられる。この徹底した

実証精神が、この論文の説得力を支えていると思われる。

本研究では日記作家サミュエル・ピープスの日記を網羅的に調べて、チャールズ二世の王妃であるキャサリン・オブ・ブラガンザが紅茶を飲んだ最初の王妃であり、喫茶の流行を作り出した王妃であったことを論証しており、その試みは成功していると思われる。さらに本論文において、サルラ氏はキャサリンの再評価を試みているように見える。氏の指摘する通り、英国史におけるキャサリンの評判は良いものではなかった。しかし本論文では、キャサリンのイギリスへの経済的貢献、宮廷における重要性、チャールズのキャサリンへの誠実さなどを再評価している。この再評価はイギリスにおける歴史学の動きと同じ流れの中にあるように見える。従来の主流の歴史観はホイッグ史観、進歩史観の流れの中にあっただといえるであろう。その歴史記述においては、英国の保守派であるトーリー、国教会内部のハイ・チャーチ、およびカトリックの人々に対して低評価が与えられる傾向が強かった。これは必然的にカトリックのキャサリンの低評価と軽い扱いに繋がっていたと推測される。このイギリスの歴史観が修正されたのは、1980年代以降の歴史修正主義者と呼ばれる実証主義的な歴史家たちの登場以後であり、本論文のキャサリン像の修正は同時代の歴史学の変化を反映しているように見える。そして本論文がチャールズ二世と弟であるジェームズ二世に仕えた官僚であったピープスの日記の分析を通してキャサリンを論じているのは、この歴史観の転換と期を一つにしているものと推測される。17世紀のピープスの日記からキャサリン像を描きなおすことは、結果的に従来のホイッグ史観の修正になっている。この論文が最近の歴史学の変化の流れに沿った議論になっているように思われる。

さらにこの論文では実証的研究を超える試みとして、イギリスの紅茶の習慣の広がりに関して流行理論からの説明を試みている。ヴェブレンの社会のヒエラルキーに基づいたトリクルダウン理論と模倣理論や、ジンメルの階級間の模倣と差異化という古典的理論を紹介し、経済学者ケインズや現代の社会学者、経済学者などの流行理論を概観して諸理論に検討を加えている。基本的にはキャサリンをファッション・オリジネーター（流行創始者）と位置づけ、チャールズ二世とキャサリンの姪にあたるメアリ二世をファッション・コンティニューエーター（流行継承者）としている。

結論としては、当然のことながら紅茶の広がりや定着に関して諸流行理論の有効性を確認するとともに、その理論モデルの限界を確認している。「どの階級であろうと、人々が流行を取り入れて広がっていくのは彼らが上流階級を模倣したがるという理由ばかりではなく、その商品自体に価値が内在しているからである。そしてある物が精神的肉体的に快いものであり、また実用的な価値があるかどうか、

最終的にそれがどこまで流行として広がるかを決定づける」という結論は順当なものに思われる。そして、この流行理論の援用が論文全体のさまざまな要素をメタレベルで統合・整理して、一貫した議論の流れを作ることに貢献しているように見える。

従来のイギリスの紅茶の流行に関しては、植民地拡大の観点から増大する国際貿易から経済史的に見たものや、消費の面から社会史的文化的に論じたものがあり、この論文はそれらの成果を取り入れているが、社会科学的な還元主義的図式に基づいて説明するという、分かり易い方法論からは距離を置いている。また、実証的なスタイルをとっているが、多くの文献から記録を収集して事実を積み上げて、そこから紅茶流行の広がりを経史的に証明するだけの単純な実証研究ではない。さらに、キャサリン個人の果たした歴史的役割を重視して、興味深いエピソードを羅列しながら、紅茶流行の始まりの説明を試みようとした人物本位の研究というわけではない。これらすべての要素がバランスが取れており、語彙に対するアプローチと一緒に流行理論に一貫性を持たせている。最後に付け加えれば、本論文は17,8世紀文献の扱いにおいて、文献を当時の人間が理解した通りに読むという、フィロロジストとしての能力を示している。また、今後の日本における近世イギリス文化研究の一つのあり方を示しているといえる。刊行物レベルであれば、現代のエディションに無い著作物でも、データベースを利用することによって、イギリスにおけるのと同様のリサーチが可能であることを示している。以上の諸点から、本論文は多方面から紅茶の流行を考察した本格的な言語文化学的な研究であると考えられる。サルラ氏に博士号を授与するに十分足ると審査委員会は判断するものである。

以 上

添付資料：サルラ氏の学術業績

論文（全て単著）：

2008年3月 “The Mother of The Afternoon Tea—Anna Maria Stanhope”

大東文化大学外国語学会『外国語学会誌』第38号, pp.325-341.

2009年3月 “Catherine of Braganza's Impact on English Cultural History”

大東文化大学外国語学会『外国語学会誌』第39号, pp.169-182.

2010年3月 「意味論の視点から考察する茶文化の発展」

大東文化大学大学院外国語学研究科『外国語学研究』第12号, pp.77-85.

2011年3月 “Tea and the New History of Consumption in 18th Century England”

大東文化大学外国語学会『外国語学会誌』第41号 pp.59-71.

2012年3月 “Tea Parties and Their Spread in the Late 18th Century”

大東文化大学大学院外国語学研究科『外国語学研究』第14号, PP131-137.

2013年9月 “From China to England: The Development of Tea Related Vocabulary in England during the late 1600s and the Beginning of 1700s as a British Cultural Tradition”
The American Society and Geolinguistics: *Language and Popular Culture* 38, PP31-43.

2014年3月 “The History of Compound Words and Phrases Containing Tea”

大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第31, PP119-140.

2014年3月 “Queen Mary's Tea Table”

大東文化大学外国語学会『外国語学会誌』第43号 pp.99-109.

学会発表：

2013年3月 「チャールズ2世統治時代以降の茶に関する語彙 — イギリス茶文化伝統の始まりを背景として」

英米文化学会第140回例会 日本大学歯学部

2013年3月 “Tea and Sugar and Hopkins”

The Hopkins Conference - Regis University

2013年9月 “The Portrayal and Uses of Tea in English Drama during the Reign of Queen Anne”

英米文化学会第31回大会 日本大学文理学部

2013年9月 “Hohhot and Ulan Bator: Two Mongolian Polyglossias”

Multilanguage Proficiency: Language, Polyglossia and Polyglottery. Baruch College